

独立性の高いテ形・連用形について

白川博之
(1989年9月20日受理)

1. はじめに

用語の活用形には、文末で文を完結させるものとそうでないものがある。テ形・連用形は、文を完結させない活用形に分類される。

たとえば、

- (1)a. 明日、京都へ行く (基本形)
- b. 昨日、京都へ行った (過去形)
- c. 明日、京都へ行こう (推量意向形)
- d. 昨日、京都へ行ったろう (過去推量形)
- e. 明日、京都へ行け (命令形)

において、傍線部の述語は、すべて、そこで言い切つて、文を完結させているが、

- (2)a. 京都へ行って (テ形)
- b. 京都へ行き (連用形)

たとえば、特殊な命令文を除けば、ふつうは、傍線部での言いさしであつて、それだけでは、文として不完全である。【1】

ところが、テ形・連用形の節の中には、次のように、形の上では言いさしでありながら、意味的には、独立文とはほぼ同等の完結性を備えたものがある。

- (3) 人間の観察力にはそれぞれ盲点があつて、私は相手の服装・装身具にたいして、ほとんど関心がない。(街角、p.227)
 - (3)では、文末まで待たなくとも、傍線部のテ形までの部分だけで既に意味的に文相応の完結性を備えている。このことは、次のように、傍線部を基本形(終止形)で言い換えてもほぼ等価であることから、窺える。
 - (3') 人間の観察力にはそれぞれ盲点がある。私は相手の服装・装身具にたいして、ほとんど関心がない。
- 次の文も、同じような例である。

- (4) 一体、学校で習ふ教科書といふのは、おもしろくないもので、シェイクスピアだつて、『源氏物語』だつて、教科書で読めば反感がさきに立つ。(ポケット、p.67)

この連用形も、次のように、ほぼ等価な独立文に言い換えることができる。

- (4') 一体、学校で習ふ教科書といふのは、おもしろくないものだ。シェイクスピアだつて、『源氏物語』だつて、教科書で読めば反感がさきに立つ。

このようなテ形・連用形は、後続する部分に依存しなくても、独立した文と同等の意味的完結性をもっている。その意味で、「独立性の高い」テ形・連用形と呼ぶことにする。

この論文では、このようなテ形・連用形による接続表現について、その意味的・統語的特徴や、接続された節と節の意味関係を調べてみる。

2. 独立性の高いテ形・連用形の特徴

独立性の高いテ形・連用形の用例を収集してみると、ある種の述語に限って、このようなテ形・連用形を作りやすいことがわかる。少なくとも、次の3種類の述語が、独立性の高いテ形・連用形を作りやすい。

- (5)a. モダリティを表わす助動詞 (の一部)
- b. 判断形容表現
- c. 「ある」「いる」など

2. 1. モダリティを表わす助動詞 (の一部)

たとえば、次のような例がある。

- (6) 氏は志賀直哉の文章を高く評価していたようで、「城の崎にて」の一部を引用して絶賛している。(石膏、p.167)
- (7) 話してみると彼は民族音楽のファンであるらし

く、だいたいいつもいろいろな国の音楽を流しながら車を運転しているそうだ。(朝日堂、p.30)

- (8) 文章を草するという行為は、もともと特殊技能でもなんでもないのであって、小学生以上の日本人ならだれにでも可能な作業なのである。(にっち、p.60)

傍線部の助動詞は、(6)、(7)が寺村(1984)のいわゆる「概言」のモダリティを表わす助動詞、(8)が「説明」のモダリティを表わす助動詞である。

これらの文において、「テ形」・「連用形」が率いる節は、形の上では、後に続いていく接続節だが、意味の上では、実質的に独立した「文」と同等の完結性を備えている。念のために、また、独立した文への言い換えを試みよう。

- (6) 氏は志賀直哉の文章を高く評価していたようだ。「城の崎にて」の一部を引用して絶賛している。

- (7) 話してみると彼は民族音楽のファンであるらしい。だいたいいつもいろいろな国の音楽を流しながら車を運転しているそうだ。

- (8) 文章を草するという行為は、もともと特殊技能でもなんでもないのである。小学生以上の日本人ならだれにでも可能な作業なのである。

やはり、傍線部で言い切る表現とはほぼ等価であることがわかる。

モダリティを表わす助動詞のテ形・連用形が、独立性の高いものになることは、助動詞の付かないふつうのテ形・連用形が特定のモダリティを持たないことの裏返し的事实である。

用語の形用形の中で、「テ形」・「連用形」は、ふつう、「タリ形」と同様、それ自体は何のモダリティも表さないものとされている。

たとえば、三上(1972)は、(9)のような文を例に挙げて、

- (9) 某所へ行ッテ、某氏に会へば……
 ハウ
 ツタ

『「行ッテ」自身は何ら特定のムードを備えない中立的な活用形であって、ただ結びの動詞「会」のムードとテンスの適及に順応して陳述化するるのである』としている。【2】

つまり、ふつうの「テ形」・「連用形」は、それが係っていく先の述語のモダリティが分かって初めて、どんなモダリティを表わしているかが解釈できるというわけである。

テ形・連用形自体がモダリティを有していれば、そのような保留の状態は生じようがない。後続する部分

に依存しなくとも、その場でその述語の表わすモダリティが即決できる。

2. 2. 判断形容表現

ある種の形容詞、名詞+ダも、独立性の高いテ形・連用形として生じることができる。

- (10) この宗匠はなかなかかきぎしくて、連衆の差し出す付句をおいそれと採用しないし、ぶつくさ文句ばかり言ふ。(低空、p.141)

- (11) 先生の語彙が桁はづれて豊富で、雅俗の双方にわたつて奔放を極めることは、一通りの読書人なら誰でも知つてゐるが、これが談笑の席になると俗のほうの傾斜が一段と急になつて、はやり言葉や新語がぼんぼん出て来る。(低空、p.135)

- (12) 坂の下に、市場があつた。

これはまさしく「市場」であつて、汚い平家の建物にいろいろの店が雑居していた。店は崩れかかったコンクリートで、ところどころ土が露出している。(賈、p.18)

- (13) この先生は「喘息の鬼」といつてよい人物で、めつたに笑わず、重いゼンソクあるいは特種な(たとえば蝦を食べると発作を起すといつた)患者をみると、ニコリする。(石膏、p.40)

これらの文も、傍線部で区切って、次のように二文で言い換えても、ほぼ等価である。

- (10) この宗匠はなかなかかきぎしい。連衆の差し出す付句をおいそれと採用しないし、ぶつくさ文句ばかり言ふ(のだ)。

- (11) 先生の語彙が豊富だ。雅俗の双方にわたつて奔放を極めることは、一通りの読書人なら誰でも知つてゐるが、これが談笑の席になると俗のほうの傾斜が一段と急になつて、はやり言葉や新語がぼんぼん出て来る(のである)。

- (12) 坂の下に、市場があつた。

これはまさしく「市場」であつた。汚い平家の建物にいろいろの店が雑居していた。店は崩れかかったコンクリートで、ところどころ土が露出している。

- (13) この先生は「喘息の鬼」といつてよい人物である。めつたに笑わず、重いゼンソクあるいは特種な(たとえば蝦を食べると発作を起すといつた)患者をみると、ニコリする。

上の言い換えにおいて、傍線部での言い切りは、不完全な(文を途中で言いさしたような)感じがしないことに注意されたい。第1文は、第2文に依存することなく、固有の主張(assertion)を有しているのである。

いろいろな例を収集して比べてみると、どうも、これらの述語は、草薙 (1978) の言う意味での「判断形容表現」という共通点を持っているようである。「判断形容表現」は、話者の主観的な判断の結果を表わす。形容詞で言えば、「おもしろい」、「美しい」、「上手だ」、「いい」などの形容表現がこのクラスに分類される。

【3】

ここで重要なのは、「主観性」という概念である。「判断形容表現」は、主観的表現である。詳しくは、草薙 (1978) を参照していただきたいが、主観的な表現か否かは、「～と思う」という表現をつけて意味が変わるか否かでテストすることができる。

たとえば、「いい」という形容詞は、主観的な表現である。なぜならば、下の二例の比較で分かるとおおり、「～と思う」をつけた表現もつけない表現も同じ状況で用い、かつ、差はほとんどない。

(14) この本はいい。

(15) この本はいいと思う。

モダリティの定義を「話し手の発話時における心的態度の直接的な表明」とするならば、「判断形容表現」は、「直接的」な表明ではない(分析的である)のでモダリティ表現とは言えないが、話し手自身の主観的な態度を表明している点で、モダリティ表現と似通ったところがある。

このような「テ形」・「連用形」で接続された前件と後件とは、同一の文に納まっているが、前件は主観的な判断表明、後件は客観的な事実報告、という具合に、それぞれ独立した主張をしている。つまり、後半を待たずして前半だけで、既に独立した文と同等の主張が行われているために、形は後に続いていながら、意味的には区切れているという感じを与えるものと考えられる。

2. 3. 「ある」

「ある」という動詞のテ形・連用形も、しばしば、同様の振る舞いをする。

(16) この確信犯といふものには、道徳的確信犯のほかに、宗教的確信犯といふのがある。クェイカー教徒の兵役拒否なんかがそれである。それからまた政治的確信犯といふのもあつて、ロシアのアナーキストのテロ行為なんか好例といふことになる。(低空、p. 46)

(17) 遠藤に聞いてみると、このナニワ節は、北所蔵のテープの一部だそうである。そのテープは、北がえんえんとタンタンタスキとうなっている。その合間に、自分で水割りをつくっているらしくコップと氷の触れ合う音がしたりして、最初は笑っ

て聞いていたがしだいに不気味になってきた、と言っていた。一応のストーリーはあつて、やがて狸と怪盗マブセとの決闘になるのだそうである。

(街角、p. 96)

(18) あるとき、ある都市デザインをする専門家が、いかに人間の環境を変えて変革していったところで、詩人のひとつのコトバの方が独裁的かもしれない、といったことがあつて、それはなるほどそうかもしれないけれども、ほんとうは詩人という名まえの特別のヒトがこの世の中にいなくなるのがいばばすばらしくて、人間は、その環境を変え、その変えられた環境を、どうよんでいいのかわからなくても、コトバをやりくりしてなんとか呼びたければ呼ぶであろう。(木馬、p. 52)

「ある」という動詞の連用形が、大きな区切りを作ることは、つとに三上 (1963) が指摘している。

三上の挙げた例文は、次のようなものである。

(19) 一方的な退職、退学処分は人権侵害のおそれあり、今後このような処分をしないよう十分注意されたい。【4】

三上は、中立法どうしを比べた場合、状態的な動詞の方が完結的な動詞よりも区切り方が大きい傾向があることを指摘している。さらに、この差は、前者が併存的な意味を表わし、後者が継起的な意味を表わすことと関係があるとの指摘をしている。(19)において、「ある」は、まさに状態的な動詞であるから、そこでの区切りが大きくなるわけである。

なぜ併存的な意味を表わす連用形が大きな区切りを作るかについては、三上は踏み込んだ説明をしていない。わたくしも、その理由はわからないし、また、前提となる傾向自体についても、当否が定かでない。しかし、「ある」に限って言えば、確かに、区切り方が大きいようである。

わたくしの、目下のところの推察では、「ある」によって率られる節と、後続する節の間で文の類型に違いがあるので、大きな区切りを感じるのではないかと、と思われる。すなわち、(16)～(18)のようなテ形・連用形が率いる節は、文の類型から言うと、新たなものごとを言語表現の場を導入する「現象描写文」であり、それを承けて、後続する文には、そのものごとについて述べた「判断文」になっているのではないかと。

【5】もっと言えば、テ形・連用形までの部分で既に「現象描写文」の体をなしているもので、そこに、意味的な区切れが感じられるのではないかと推察される。

以上、(5)に挙げた3種類の述語について、それぞれ、どのような事情で、テ形・連用形が独立性の高いもの

になるのかを考えてみた。

3. テ形・連用形の節と独立文との平行性

この章では、少し観点を換え、テ形・連用形が文相当の完結性を備えた結果生じたと思われる二、三の統語の特徴を考える。つまり、テ形・連用形の節が、外形はともかく、意味的に文相当の独立性を持っていると考えるときうまく説明がつくような現象を観察することによって、この種のテ形・連用形の独立性の高さを、側面から立証しようという目論見である。

3. 1. 後続する文が改めて主題を持つことができる

たとえば、次のような文を観察してみよう。

(19) エッセイの連載というのは毎回違う話を書くわけで、これは甚だ辛い。(賢, p.311)

前件の主題は、「エッセイの連載というのは」であるが、これは、「わけで」までしか係って行かない。後件は、新たに「これは」という新主題で始まっている。次の文も、同様である。

(20) もう七回忌ですから、湿つばい話はよして、案しく、和田芳恵さんをしのぶことにしませう。それにわたしには湿つばい話はあまり向かないやうで、これは和田さんも認めてゐたことです。(挨拶, p.147)

(21) 美的趣味は社会と文明によつて異なるので、このことは樹木を例に取ればもつともはつきり判る。(ポケット, p.17)

後半の節の主題は、「代名詞」であるとは限らない。

(22) 納税という行為に、意欲という言葉はもっとも結びつかない言葉であって、税金というやつは、しづしづ、イヤイヤ、あるいは泣く泣く納めるものと、古往今来相場がきまっている。(にっち, p.143)

(23) 批評家といふものはゴシップが好きなのである。これだけ俗な話が好きならどうして小説家にならないのか、とはたから見ると不思議でならないのだが、しかし小説は書かずにただゴシップを愛する、それが批評家の生理らしい。もっとも彼らが小説を書かないのは当然なので、批評家の好むゴシップは世の常のそれではなく、文筆家の噂話なのである。これではやはり小説にはなりにくいだろう。(低空, p.189)

また、前件と後件の主題が同一の場合には、後件の主題はふつう明示されないが、まったく明示できないわけではない。【6】

(24) 橋本一明といふこの青年は、大変なおしやべり

で、もし自分があなくなれば日本のフランス文学研究は駄目になつて、鈴木信太郎先生も渡辺一夫先生もどんなに悲しむか、といふやうな駄法螺を吹く。(低空, p.146)

(24)は、(24')のように言っても、それほどおかしくはないだろう。

(24) 橋本一明といふこの青年は、大変なおしやべりで、彼は、もし自分があなくなれば日本のフランス文学研究は駄目になつて、鈴木信太郎先生も渡辺一夫先生もどんなに悲しむか、といふやうな駄法螺を吹く。

以上の例は、前件が有題文であったが、前件が無題文である場合は、後件の節は、新たに主題を持つことになる。この主題は、前半の節で導入されたものごとである場合が多い。

(25) 現在、私の机の上に、玉ノ井界限の精細を極めた地図があって、これは滝田ゆう手書きのものである。(街角, p.61)

3. 2. 後続節との間に接続詞(相当語句)を挿入できる

独立性の高いテ形・連用形が、文相当の完結性を持っている現れとして、多くの場合、前件と後件の間に接続詞(またはそれに準ずるもの)を挿入できるという事実がある。

(26) ところが東京といふ街では、あらゆる国の西洋料理を食べることができる — 日本洋食を含めて。しかもその西洋料理は、わりあひ程度が高い場合もあるやうで、たとへばスモークボードといふ北欧料理、これは日本のヴァイキング料理をうんと豪華にしたと言へばいいかもしれないが、ニューヨークにあるスモークボードの店と東京は麻布十番にあるストックホルムとをくらべると、こつちのほうが遥かに上らしい。(低空, p.36)

(27) 製作してから50年近く経つとやはり古くなっている部分があって、たとえば当時は目新しかった遊園地の鏡張りの部屋を使った長いシーンは、私には退屈だった。(石膏, p.102)

挿入された接続詞は、その直前で、一旦、述べ立てが完結していることを示している。接続詞がなくても意味的に完結性を備えているテ形・連用形の節が、さらに、独立文に近い様相を呈しているわけである。

挿入される接続詞は、後続する文との意味関係によって、いろいろある。(28)は「要するに」、(29)は「つまり」が挿入された例である。

(28) と考えると、彼らが政治的確信犯であつたかど

うか、ずいぶん疑はしくなつて来るので、要するに、政治的ではあつたけれども確信犯ではなかつたといふことになるのぢやないか。(低空、p.48)

- (29) こんな具合に、銀行の支配性は明白なのに、アナキストに限らず、われわれは概して銀行に敵意をいだいてゐない。これがわたしにはどうも不思議で、つまり、考察に価する現象のやうな気がするのだ。(低空、p.59)

3. 3. 話しことばでは文を完結させることができる

これは、話しことばに限って言えることだが、独立性の高いテ形・連用形は、意味的に終止形と等価であるばかりでなく、実際に文を完結させる場合がある。

- (30) 吉行 (中略) 遠藤周作が変なレコードを送ってきて、「遠藤周作とその世界」でしたっけ。

北 「沈黙となんとか」って書いてありましたね。片目が『沈黙』の朗読で、片目が歌が入っているわけです。

吉行 ほうっておいたら遠藤から電話がかかってくる、北の浪花節だけはきいてくれているんで、どういふものが入っているのかときいてみたら……これがまことに凄いな浪花節だね。

北 凄いなというのは、詳しくいうとどういふことですか。(笑)。(恐怖、p.147)

- (31) ぼくが驚いてゐますと、菊池さんは平然として、「語学教師といふのは詰らぬ商売でしてね。わたしは朝、渋谷の駅で降りて、途端に学校へゆくのが厭になるんです。そこで道玄坂を上つて、喫茶店にはいる。ますます厭になる。で、電話をかけて断つて、家に帰るんです。よくありますよ、さういうこと」

などと言ふんです。(挨拶、p.26)

- (32) 鴻上 (前略) それに激辛やホラーブームと同じで、不倫というのも日常から脱出すべきひとつのきっかけだったわけです。ところが脱出できたなど思ったのに、不倫は、なんのことはないもっと重たい現実を連れていつも帰ってくるわけです。それで不倫はあつという間にすたれてしまったわけ。(恋愛、p.19)

ついでながら、落語に特徴的に現れる次のような文末表現は、このテ形・連用形を様式化したものではないかと思われる。

- (33) 江戸と申しました時代に、隅田川というのはこりゃもう、まことに何ともいえない趣きがありましたもので……。 (斬、p.147)

- (34) 欲というのはどなたにもありますもので、「おれはもう、無欲だよ」なんてえことをいいますが、

まァ、本当の無欲の人なぞないといつてよろしいんだそうで……。 (斬、p.60)

以上、3点から見てきたとおり、独立性の高いテ形・連用形の節の統語的な振舞いには、独立文との平行性が認められる。

4. 節の接続と文の接続との平行性

テ形・連用形の節が独立文と等価であるとすれば、テ形・連用形によって繋がれた2つの節の関係は、隣り合った2つの独立文の関係と平行的なのではないかという予測が立つ。

もっと正確に言えば、接続詞(相当語句)によって結び付けられていない2文の接続関係と類似点が見出せるのではないかという予測である。

テ形・連用形という接続形式は、それ自体は、何の意味も表わさず、ただ前件と後件とを繋ぐ機能しか持っていない。繋がれているから両者の間に何らかの意味関係があるということは、消極的に表示されているが、その意味関係の種類は、明示されていないのである。その点で、接続詞(相当語句)が介在しない2文の接続関係と平行的であると考えられるのである。

4. 1. 接続関係の2分類

独立性の高いテ形・連用形による2つの節の接続と等価のものを2つの文の接続に求めるとしたら、どのようなものがこれに相当するのか。

たとえば、次のような文章で考えてみよう。

- (35) 中国人が中国料理に満足するほど、日本人は日本料理に満足しない。と言つて、もちろん和食が嫌ひなわけではなく、和洋中華、何でも好きなのである。洋と言つてもすこぶる幅が広く、フランス料理もよければドイツ料理も悪くない。イタリアだつてスイスだつてかまはない。(低空、p.32) この文章の第3文(「洋と言つても〜」)を、2つの文に分けようとするなら、連用形を基本形に換えるだけでなく、後続する節の文末にも、次のように「のだ」をつけた方が断然座りがよい。

- (35) 中国人が中国料理に満足するほど、日本人は日本料理に満足しない。と言つて、もちろん和食が嫌ひなわけではなく、和洋中華、何でも好きなのである。洋と言つてもすこぶる幅が広い。フランス料理もよければドイツ料理も悪くないのだ。イタリアだつてスイスだつてかまはない。

これは、連用形が担っていた役割を「のだ」が代行しているのだと考えられる。いかにテ形・連用形が意

味関係の表示機能において積極的でないにしても、それの繋ぐ前件と後件に何らかの意味関係があることだけは、明示している。つまり、何の標識もなく、2文を並置するだけという全く消極的な手段よりは、両者の関係を積極的に表現しているのである。「のだ」には、そのついで文と前の文との関係づけを表示する機能があるから、これで連用形の果たしていた機能を代行させたというわけである。

このように、2文に書き直すと「のだ」が現われるという現象は、ほかの例にも広く見られるようである。たとえば、

(36) 歳時記や季寄せを見ると「厄落し」という季語はあるけれども、厄年という季語はない。ないのが当然で、厄年に季節は無縁である。(にっち、p.198)

(37) 坂の下に、市場があった。

これはまさしく「市場」であって、汚い平家の建物にいろいろの店が雑居していた。床は崩れかかったコンクリートで、ところどころ土が露出している。(=12)

この2例について書き直してみても、やはり、同様な結果が得られる。

(36) 歳時記や季寄せを見ると「厄落し」という季語はあるけれども、厄年という季語はない。ないのが当然である。厄年に季節は無縁なのである。

(37) 坂の下に、市場があった。

これはまさしく「市場」であった。汚い平家の建物にいろいろの店が雑居していたのだ。床は崩れかかったコンクリートで、ところどころ土が露出している。

一方、このような書き直しがそぐわないものもある。たとえば、次のような文がそうである。

(38) この確信犯といふものには、道徳的確信犯のほかに、宗教的確信犯といふのがある。クエイカー教徒の兵役拒否なんかそれがそれである。それからまた政治的確信犯といふのもあつて、ロシアのアナーキストのテロ行為なんか好例といふことになる。(=16)

この文を試しに前例と同様に書き直してみよう。

(38) この確信犯といふものには、道徳的確信犯のほかに、宗教的確信犯といふのがある。クエイカー教徒の兵役拒否なんかそれがそれである。それからまた政治的確信犯といふのもある。ロシアのアナーキストのテロ行為なんか好例といふことになるのだ。

この文はおかしい。次のようにするべきである。

(38) この確信犯といふものには、道徳的確信犯のほ

かに、宗教的確信犯といふのがある。クエイカー教徒の兵役拒否なんかそれがそれである。それからまた政治的確信犯といふのもある。これは、ロシアのアナーキストのテロ行為なんか好例といふことになる。

一般に、「ある」「いる」のテ形・連用形は、このように、他のテ形・連用形とは、違う扱いが必要なようである。そして、この場合、第1文の中の語句を第2文で承けて反復する(例えば指示語句などを使って)と、等価な連文ができるようである。

「ある」「いる」以外の述語でも、同様な接続を呈することができる。

(39) もう七回忌ですから、湿つばい話はよして、楽しく、和田芳恵さんをしのぶことにしませう。それにわたしには湿つばい話はあまり向かないやうで、これは和田さんも認めてみたことです。(=20) この文では、2文に書き換えるまでもなく、「これは」という指示語句が、前件の節との関係の指標になっている。

ここまでのところをまとめると、独立性の高いテ形・連用形による接続は、書き換えという作業を通して、等価の接続関係を求めることによって、次の2種類に大別される。

- (40) a. 「のだ」文による接続関係と平行的なもの
- b. 語句の受け継ぎによる接続関係と平行的なもの

4. 2. 「のだ」による接続関係との平行性

永野(1986)は、隣り合う2文の接続関係の類型を、指標となる言語形式によって、7種類に分類している。そのうち、「のだ」が指標となっている類型は、「補足型」である。「補足型」とは、「前の文の内容に対して、あとの文で説明を補う関係」を指す。次のような例を挙げている。【7】

- (41) クラス会には出席できません。あいにく当日仕事があるからです。
- (42) 芝居なんて見たくありません。退屈なのです。
- (43) わたしは、彼に同情しない。なぜなら、彼には誠意がない。

「のだ」の用法には他にもいろいろある。(41)(43)から類推する限り、永野は他の用法を考慮に入れていないようにも考えられるが、「補足型」という捉え方は、「のだ」の用法の重要な面を言い当てていて貴重である。

吉田(1988)は、「のだ」の文間効果を網羅的に扱った好論である。結論的には、「のだ」の文間効果は、大別すると次の2種類になる。

- (44) a. 根拠づけ：相関文による要求行為の背景・事

情を説明するもの、

例：消しゴムを貸してくれない？ 忘れてきちゃったんだ。

b. 捉え直し：相関文の内容事態を別の角度から捉え直したもの

例：彼は手品のタネを舞台上に落とした。彼はひどく緊張したのだ。

わたくしの論との接点として興味深いのは、次のような「のだ」についての説明である。

(4) あいつは本当にしかたのない奴だ。ゆうべあんなにクダを巻いたのを全然覚えていないって言うんだ。

吉田によると、(4)は(4)bの例と同じく「捉え直し」の中に括られるという。【8】

わたくしの考えでは、(4)の「のだ」文は、自分の発言行為（判断の表明）についての事情説明であり、むしろ、(4)aの用法と同類に扱うのが妥当である。「根拠づけ」の効果を、要求行為がされることの背景や事情などを述べてこの要求行為を補足的に正当化することだと見定めるのならば、(4)は、一見主観的な決めつけのように見える判断表明の行為を、あとから判断のよりどころを補足することによって正当化しているのだから、まさに「根拠づけ」の効果を持っていると考えるべきである。

わたくしの注目するのは、(4)aと(4)bとの間に見られる「のだ」文の依存性の違いである。吉田氏自身も指摘しておられるとおり、「根拠づけ」の「のだ」文は、「要求表現にその補足という形で依存」しており【9】、「命令」「質問」などの要求作用自体と補い合う関係にある【10】。それに対して、「捉え直し」には、このような依存関係はない。「根拠づけ」の「のだ」文の機能を「前言の補足」というとしたら、「捉え直し」の「のだ」文は、「前言からの発展」とでも言うべき機能を持っているのである。

さて、議論が「のだ」の用法に深入りしてしまったが、本筋に戻ると、「のだ」を使って2文に言い換えることができるテ形・連用形の前件と後件との関係は、わたくしの見るところ、「主観的判断の表明」と「前言の補足」という関係にまとめられる。

「前言の補足」の仕方にはいろいろあって、違いに応じてさらに下位分類が可能である。その具体的な中身については、章を改めて検討する。

4. 3. 語句の受け継ぎによる接続関係との平行性

テ形・連用形による接続を2文に言い換えたとき、語句の受け継ぎが接続の指標となる場合というのは、復習になるが、たとえば、次のような場合である。

(46) 神田連山という人がいて、神田山陽の元の弟子である。(眞、p.182)

これを2文に言い換えると次のようになる。

(46) 神田連山という人がいる。その人は、神田山陽の元の弟子である。

もっとも、このタイプのテ形・連用形は、もともと指示語句が挿入されて使われる場合が多い。

(47) もつとも、わたしの大声はいざとなると小声も出るといふ点が非常に音楽的なのださうで、このことを指摘したのはやはり桐朋で教へてゐた、音楽評論家の寺西春雄さんである。(ポケ、p.150)

(48) 新宿の酒場にとってもおいしい豆腐を出すところがあって、僕はそこにつれていってもらった時、あまりのおいしさに豆腐を4丁たてつづけに食べてしまった。(朝日堂、p.101)

この点で、このタイプのテ形・連用形の接続は、前節で見たタイプよりも、相関する2文の連接との差が小さいと言える。より独立性の高いテ形・連用形だと言ってもよい。

このタイプの接続関係は、永野(1986)の分類でいうと「展開型」の接続関係と全く平行的である。「展開型」とは、「前の文の内容を受けて、あとの文でいろいろに展開させる関係」をさし、「前の文の後を直接に受けて述べたり、指示語で受けて続けたりすることが多い。【11】

5. 後統節による「補足」の仕方

この章では、前の章で行った接続の2分類のうち、とくに、後統節が「前言の補足」の機能を果たしている場合を取り上げて、「補足」の仕方をもう少し立ち入って調べてみる。それによって、前件と後件との接続関係の全体像がはっきりと浮かび上がってくるはずである。

後件による前件の補足の仕方は、少なくとも、次の3つの類型に分類できる。

- (49) a. 「一般的→具体的」タイプ
- b. 「結論→根拠」タイプ
- c. 「難解な表現→平易な表現」タイプ

5. 1. 「一般論→具体化」タイプ

(50) 一体、学校で習う教科書といふのは、おもしろくないもので、シェイクスピアだつて、『源氏物語』だつて、教科書で読めば反感がさきに立つ。
(=(4))

前件は、「一体」という前置きがよく示しているように、一般論である。もっと言えば、ある具体的な事

実を念頭において、そこから一般化して得た判断である。まず前件で結論的にこの判断を表明しておいて、それを承けて後件でその判断の背景にある事情を補足的に説明する、という形になっている。

つまり、後件による補足は、前件で表明した一般化の妥当性を説明する機能を果たしているわけである。

もしも、意味関係を明示するために接続語句を前件と後件の間に補うとしたら、「たとえば」などがうまく当てはまるだろう。

次の例も同様に解釈される。

(51) この宗匠はなかなかきびしく、連衆の差出す付句をおいそれと採用しないし、ぶつくさ文句ばかり言ふ。(=10)

おそらく、この先生の「きびしさ」を示す具体的事実は、挙げようと思えば、他にも挙げられるのだろう。後件で挙げた事実は、それらのうちの一部である。

次の例は、「たとえば」その他の接続語句を後半の直前に挿入することはむずかしいが、やはり、このタイプである。

(52) 殊に下町の人が親切で、店からわざわざ道へ出て教へるだけでなく、いつしよに角まで歩いて来て、目じるしになる建物を指さしてくれたりする。(低空、p.224)

これは、後半の後ろに「といった具合である」というようなことばを添えることができるので、やはり後半で具体化していると考えられる。

このタイプの用法は、語種から言えば、判断形容表現(2.2.を参照)に比較的好く見られるようである。

5.2. 「結論→根拠」タイプ

このタイプは、テ形・連用形の直後に、「というのは」「なぜなら」といった接続語句を補うことができる。

(53) 歳時記や季寄せを見ると「厄落し」という季語はあるけれども、厄年という季語はない。ないのが当然で、厄年に季節は無縁である。(にっち、p.198)

従来のテ形・連用形の用法分類にも、「理由・原因」というものがあつた。

(54) 雨が降って花火大会は延期になりました。のような例がこれに入る。一見、今ここで考えているタイプと似ているように見えるが、理由を述べているのが前件だという点が違う。(53)では、その逆で、結論を前件で言っているのである。

この場合の後件による「補足」は、それだけだと根拠のない決めつけになってしまう前件の判断表明の裏

付けを提示する働きをしている。いわば、判決文における主文と判決理由のごとき関係である。

「概言」のモダリティを表わす助動詞の「らしい」「ようだ」「みいだ」はこのタイプの用法で使われることが多い。

(55) そのうち猫の方でもだんだん価値観が錯綜してきたようで慢性の神経性下痢になってしまった。

(朝日堂、p.53)

(56) 話してみると彼は民族音楽のファンであるらしく、だいたいいつもいろんな国の音楽を流しながら車を運転しているようだ。(=71)

「らしい」も「ようだ」も、何らかの客観的事実をもとにして推量した結果を述べる表現である。もとなつた根拠を補足する表現が続くのは、自然なことだろう。

5.3. 「難解な表現→平易な表現」タイプ

このタイプは、「言い換え」タイプと言い換えてもよい。前件で述べ立ての仕方が、わかりにくかったり、言葉が足りなかったりした場合に、後件で別の表現で言い直す用法がある。前言だけでは真意が伝わりにくいと考へて言い足すもので、やはり、「補足」の一種と考へてよいだろう。

接続語句を補うとしたら、「すなわち～」「つまり～」などがびったりくる。

典型的な用例は、次のようなものである。

(57) 坂の下に、市場があつた。

これはまさしく「市場」であつて、汚い平家の建物にいろいろの店が雑居していた。床は崩れかかったコンクリートで、ところどころ土が露出している。(=12)

「市場」に括弧がついてあることから分かる通り、前件は、「『市場』という言葉で言い表わしたらびったりとくるようなところだ」という意味である。これは、一語でその場の雰囲気と言い当てようとした総合的な表現で、後件では、それを分析的な表現に言い直して、言わんとするところの徹底を図っている。

類例を追加すると、

(58) ナンセンス漫画というのは大層ハイブラウなもので、なまじ解説などしなくても分る人には分るし、分らない人には無縁のものである。(街角、p.36)

これも、「分る人には分るし、分らない人には無縁だ」ということを一言で表現すれば、「ハイブラウなもの」ということになるのだろう。しかし、これでは多少なじみの薄い表現なので、わかりやすく言い換えている。次の文についても同様なことが言える。

(59) 手相・人相・占星術・トランプ占いなどは、人生の香辛料であって、使い方によっては味わいを増す点もあるが、信じ過ぎるのは愚かなことである。カレー粉だけのカレーライスを食べたとしたら、胃がひっくり返る。(鷹、p.308)

これは、比喩とその説明の関係である。「香辛料」という比喩は、それほど突飛なものとは思わないが、説明を補足すると言わんとすることがはっきりする。

以上、3つのタイプの「補足」について見てきたが、共通して言えることは、独立性の高いテ形・連用形の節が、ひとまず、対象(ある特定のものごと)に対する話者の判断・心証を表明し、その背景にある有様・出来事を、後続する節が具体的に補足説明するという手順である。いずれの場合においても、前件だけでは言葉足らずであり、言わんとすることを余すことなく表現しようとするれば、後件へと続けて、言い足さなければならぬわけである。

ただし、前件が言葉足らずだということと、独立した文と等価の完結性があるということは、別問題だということとは、あらためて確認しておきたい。(第2章・第3章を参照のこと。)等価な連文を考えてみればよい。後続する「のだ」文によって補足される文が、独立文ではあるが、言葉足らずになっていることと、全く平行的である。

6. おわりに

この論文では、形の上では接続節ではあるが、意味的に、独立文と等価の完結性を持つテ形・連用形の節について、後続節との意味関係を考察した。

この種の接続の特色は、続いていながら切れており、切れていながら続いているという、切れ続きの二面性である。切ってもいいところを切らずに続けている点に、この種の接続の妙味があるわけで、文章論あるいは文体論の見地から見ても、興味深い構文ではないかと思われる。

たとえば、次の文章は、切れ続きという観点から見ると大変特色のある文章である。しかも、その特色によって巧みな文章と評価されてもよい文章だろう。

(60) で、カラオケカラオケと、いまでこそこうやってしたり顔で書いたりしているけれど、白状すれば、この奇体な言葉をはじめて耳にしたとき、とっさに私、なんだ、豆腐屋の符牒か、と思った。おからを入れるオケを連想したからである。そうしたらおからではなくて、天ぷらそばの天ぬき、あれはそば屋のほうでは天ぷらそばの、そばのほ

うをぬいたものを天ぬきと称しているようで、そうなるとうまい手は天ぷらそばの天ぷらに当たるのか、そばに当たるのか、そのへんを追及してゆくとややこしいことになりそうで、要するに天ぷらそばの天ぬきと同工同趣の、流行歌の歌手抜きのことだと若い人に教わった。(にっち、p.21)

また、これは、思いつきに過ぎないが、このような接続は、英語などのセミコロンの用法とよく似ていると思われる。

(61) Taylor was, as always, a consummate actor; with a few telling strokes he characterized King Lear magnificently. 【12】

(例に違わず、テイラーの演技は至芸であった。印象的な動きを少ししただけで、リア王の役作りを見事にしてしまったのだ。)

(61)の英文においては、第1文での評価の表明を受けて第2文がその補足説明をしている。そして、2つの文が相まって言わんとすることを全うしている。セミコロンも言ってみれば、切れ続きの二面性を持った記号である。

あるいは、andによる接続の方が、もっとテ形・連用形に似ているのかもしれない。(60)は(61)のようにも言い表わせるという。

(61) Taylor was, as always, a consummate actor, and with a few telling strokes he characterized King Lear magnificently.

(例に違わず、テイラーの演技は至芸であって、印象的な動きを少ししただけで、リア王の役作りを見事にしまった。)

andも、テ形・連用形と同様、本来的には、単純に2つのユニットを結び付ける機能しか持っていない。このような日英の接続形式どうして、同じような意味関係の接続を作り出すという事実は、対照言語学の観点からも、とても興味深い。

日本語の場合でも英語の場合でも、問題は、要するに、人はどのような場合に文を切らずに続けて言おうとするかということである。それぞれの言語の中で、文体的な考慮も必要だろう。たとえば、日本語の場合、ジャンルとしては随筆に集中してこのようなテ形・連用形接続が見出された。それも何か理由がありそうで、面白い問題である。

注

【1】活用形の認定は、寺村(1984)に従った。

【2】三上(1972)、p.184。

【3】草薙(1978)、pp.96-99。

- 【4】三上 (1963)、pp. 89-90。
 【5】「現象描写文」、「判断文」という術語は、仁田 (1989) に従った。
 【6】このあたりの論法は、野田 (1989) から示唆を受けた。
 【7】永野 (1986)、p. 107。
 【8】吉田 (1988)、p. 48。
 【9】同上、p. 47。
 【10】同上、p. 48。
 【11】永野 (1986)、p. 105。
 【12】Quirk et. al. (1985)、p. 1622。

出典一覧

街角=吉行淳之介『街角の煙草屋までの旅』講談社文庫。

ポケット=丸谷才一『男のポケット』新潮文庫。

石膏=吉行淳之介『石膏色と赤』講談社文庫。

朝日堂=村上春樹『村上朝日堂』新潮文庫。

にっち=江國滋『にっちもさっちも』朝日文庫。

低空=丸谷才一『低空飛行』新潮文庫。

賈=吉行淳之介『賈食物誌』新潮文庫。

木馬=富岡多恵子『回転木馬はとまらない』中公文庫。

挨拶=丸谷才一『挨拶はむづかしい』朝日新聞社。

恐怖=吉行淳之介『恐怖対談』新潮文庫。

恋愛=「いま、恋愛の時代?」『言語生活』No. 425、1987。

嘶=三遊亭圓生『嘶のまくら』朝日文庫。

参考文献

- 草薙裕 1978 「日本語形容表現の意味 — 情報提供という観点からの考察 —」『文藝言語研究』言語篇 2 筑波大学
 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
 永野賢 1986 『文章論総説』朝倉書店
 仁田義雄 1989 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
 野田尚史 1986 「複文における「は」と「が」の係り方」『日本語学』第5巻第2号
 三上章 1963 『日本語の構文』くろしお出版
 三上章 1972 『現代語法序説』くろしお出版(復刊)
 吉田茂晃 1988 「ノダ形式の連文的側面」『国文学研究ノート』神戸大学
 Quirk, Randolph et. al. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.

[付記] この論文は、国語学会昭和63年秋季大会(於弘前大学)で行った同名の口頭発表をもとに、これを全面的に修正して成ったものである。当日会場で貴重なご意見を賜った先生方に心より感謝の意を表します。また、MBK(三上文法研究会)、軽井沢夏期日本語合宿、筑波大学日本語文法研究会の皆様にも、同じ内容の口頭発表を聞いていただき、コメントを頂戴した。各位に御礼申し上げる次第です。